

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月14日現在

機関番号：32631

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2011

課題番号：20520413

研究課題名（和文） 体系を視野に入れた古代日本語における副助詞の形成史的研究

研究課題名（英文） A study of the system of adverbial particles found in the formative history of ancient Japanese

研究代表者

小柳 智一（KOYANAGI TOMOKAZU）

聖心女子大学・文学部・准教授

研究者番号：80380377

研究成果の概要（和文）：本研究によって得られた成果は、大きく2つある。1つは、近世以前の日本語研究の歴史において、副助詞を含む文法形式がどのように分析されて来たかを明らかにしたことである。現代の水準から見て近世の文法研究の革新性と可能性を指摘したことは、特に重要な成果だと考える。もう1つは、副助詞を含む文法形式およびその意味が、どのように形成されるかを明らかにしたことである。発話者の望・不望という評価が副助詞の意味の発生に関わることや、格助詞と副助詞にまたがる形式の意味的な特徴を明らかにしたことは、特に価値の高い成果だと考える。

研究成果の概要（英文）：There are two results obtained by this research. One is having shown clearly how the grammar form containing an adverbial particle has been analyzed in the history of the Japanese research before modern times. It is an especially important result to have pointed out the innovation and possibility of grammar research of the Edo period seen from the present-day level. Another is that the grammar form containing an adverbial particle and its meaning showed clearly how it is formed. Especially the thing for which the semantic feature of the form over a case-marking particle and an adverbial particle was clarified is a worthy result.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：日本語史、日本語学史、副助詞、文法変化

1. 研究開始当初の背景

本研究は、以下に挙げる3つの研究動向を背景として開始された。概略を示せば、(1)は副助詞に関する研究動向、(2)は文法変化に関する研究動向、(3)は副助詞研究に関する

研究動向、である。

(1) 国語学の伝統を継ぐ（主として古代語を対象とする）副助詞研究は、昨今さかんな、現代語のとりたて研究と複雑な関係にある。

新しいとりたて研究が古い副助詞研究に取って代わったと見る向きもあるようだが、そのような研究史的な理解が妥当かどうかは全く検討されていない。そもそも、この2つの立場を正面から比較した研究はなかった。本研究代表者は、副助詞研究という立場に立つが、とりたて研究の立場とくらべることを通して、自分の立ち位置を明確にする必要に迫られた。

(2) 研究代表者は、これまでに古代語の個々の副助詞の記述的な研究を重ね、また、いくつかの副助詞同士を比較する研究を行ってきた。その過程で、先行研究（例えば、近藤泰弘(2000)『日本語記述文法の理論』ひつじ書房）を踏まえ、副助詞と呼ばれる一群が大きく2種類に分かれることを、それまで以上に明確にした。研究代表者の用語では、それぞれを「第1種副助詞」、「第2種副助詞」と称する。第1種副助詞（「ばかり」「まで」）は前接部にだけ関わり、第2種副助詞（「のみ」「さへ」「だに」）は節全体に関わると考えられる。また、研究代表者の最近の研究によって、様相性と数量性という観点を有効に設定すると、従来は雑多な助詞の寄せ集めと目されて来た中古語の副助詞が体系的に捉えられることがわかり、その見通しを発表していた。しかし、中古語で想定される体系は、上代語ではまだ形成されていなかったようであり、中古語だけを見ては不十分であることがわかってきた。そのため、中古語の副助詞の体系を鮮明に描くために、上代からの歴史的变化を視野に入れる必要が生じた。

(3) 文法形式の変化に関する研究では近年、「文法化 (grammaticalization)」に関心が集まっている。日本語研究で取り上げられる「文法化」は、主として内容語の機能語化を指し、その事例は様々な言語で報告されている。しかし、「文法化」の理論そのものを検証する研究は意外にも少ない。一方で、伝統的な国語学研究でも文法的語彙の変化は研究されており、これまでに多くの知見が蓄積されている。それらの知見を踏まえた上で、「文法化」の理論の新規性と、理論的射程を測る必要がある、現在はその時期に来ていると思われる。そしてまた、「文法化」の理論とは別の立場から、文法形式の変化にアプローチすることも可能であり、研究代表者も以前、副助詞の変化についてそれを試みたことがある。このような状況で、理論先行ではない歴史的变化の研究を行うことが重要になっていた。

2. 研究の目的

本研究の目的として、以下に挙げる3つを設

定した。概略を示せば、(1)は副助詞研究史に関する研究目的、(2)は副助詞の体系に関する研究目的、(3)は副助詞の歴史的变化に関する研究目的、である。

(1) 現代語のとりたて研究が登場する以前の、伝統的な副助詞研究の歴史について考察する。中世まで遡って歌学書・連歌論・語学書などを調査し、関連する記事を採集する。副助詞（当時この用語で呼ばれていたわけではないが、現在「副助詞」と呼んでいるものに相当する語類）をどのように理解していたかを明らかにする。特に言語研究が盛んに行われるようになった近世には、重要な文法書も著されているので、そこから読み取れる文法意識と副助詞観を明らかにしたい。これは、現代における副助詞研究の立場を明確にするために、必要な課題である。

(2) 古代語のヨリ類の意味用法を記述し、副助詞全体の中に位置づける。上代のヨリ類には「より」「ゆり」「よ」「ゆ」という4つの語形があり、従来の研究はこれらの新旧を問題としていた。そのため、ヨリ類全体がどのような意味用法を持つのかを詳細に記述する研究はなく、「より」「ゆり」「よ」「ゆ」の意味的な分布差を観察する研究もなかった。また、ヨリ類は普通、格助詞として扱われ、副助詞研究の対象外とされている。しかし、ヨリ類には第1種副助詞としての側面があり、副助詞の体系を考える上で不可欠の成員である。ヨリ類の意味用法を詳細に記述することは、個別的な助詞の研究にとどまらず、副助詞全体の体系をより明確に描くために、必要な課題である。

(3) 上代と中古のヨリ類を比較し、古代語のヨリ類がどのような歴史的变化を経たかを明らかにする。中古語の副助詞と比べると、上代語の副助詞は用法の上で異なる点があり、上代から中古にかけて変化したことがわかる。特に顕著なのは第1種副助詞で、一口で言えば、上代ではまだ第1種副助詞は成立しておらず、中古になって成立した。「ばかり」と「まで」については、その過程を考察した研究が本研究代表者にあるが、ヨリ類（中古には「ゆり」「よ」「ゆ」がなくなり、「より」だけになるので、「より」に限定してもよい）についてはまだ研究していない。ヨリ類の第1種副助詞化の過程を明らかにしたい。これは、上代から中古への変化を、副助詞の体系構築へ向けての形成史と捉えるもので、本研究のメインテーマである形成史的研究の課題である。

3. 研究の方法

本研究の基本的な方法は、古代語研究としてきわめてオーソドックスなもので、文献と用例を採集し、細心の注意を払って確認および吟味した上で、それらのデータに基づいて考察を行うというものである。ただし、考察を行う際の視点に独自性がある。それは、副助詞研究という立場に立つことを明確にし、この立場によってはじめて可能となる分析を行ったことである。くわえて、個々の対象を考察する際にも全体に目配りをしながら検討する態度を保持した。以下に具体的に述べる通りである。

(1) 副助詞研究の立場に立って考察を行う。とりたて研究と比べた時、副助詞研究の最も際立った特徴は、形式の同一性の重視である。例えば、「だけ」には「水だけ飲む」のような「限定」の用法の他に、「欲しいだけ飲む」のような「分量」の用法があるが、とりたて研究では、要素のとりたてを意味する限定の「だけ」に限ってとりたて（とりたて詞・とりたて助詞）とするが、副助詞研究では、「だけ」という同一形式のものすべてを副助詞とし、限定や分量などは副助詞「だけ」の個々の意味用法として捉える。つまり、とりたて研究と副助詞研究では、研究対象が異なっているのである。また、とりたて研究は、集合内からとりたてた要素と他の要素の関係を意味論的な出発点とするが、副助詞研究はより根本的な数量性を出発点とし、これに基づいて副助詞の諸用法を統一的に理解しようとする。本研究では、この副助詞研究の立場に立ち、副助詞の形式と意味を総体的・統一的に把握することにした。

(2) 全体的な体系を視野に入れながら、個々の助詞を考察する。これまでの古代語研究では、個々の助詞・助動詞をそれぞれ単独で詳細に観察することを得意としていた。そうしたことの積み重ねを経て、現在の研究水準があるので、貴重な成果ではあるが、助詞・助動詞同士の関係を全体として捉える視点が現代では重要になって来ている。副助詞の研究についても、このことは当てはまる。本研究が主としてとりあげるヨリ類は、従来は格助詞として扱っていたので、そもそもこれを副助詞の体系内に位置づけて考察しようとしたものがなかったが、副助詞全体の体系を見据えた上で、ヨリ類の個性を明らかにすることにした。

(3) 場当たりの説明を避ける。その時その言葉に起こった歴史的な変化は、1回限りのことなので、自然科学の研究のように再現することができない。そのため、歴史的な変化を扱う研究では場当たりの説明に陥っ

てしまうことがある。それを避けるために、様々な方法を並行して試す必要がある。例えば、1つは、その現象を孤立して考えるのではなく、周囲の現象と関連づけて、より蓋然性の高い方向へ導く方法である。もう1つは、日本語史の中で他に類似の現象がないかを探り、あれば、それと合わせて統一的な説明が可能であるか試みる方法である。3つめは、他言語に類似の現象があれば、それとの対照を行う類型論的な方法である。こうしたことを念頭に置きながら、文法変化を考察することにした。

4. 研究成果

本研究の成果は、副助詞の日本語学史的の研究に関するものと、副助詞を含む文法形式の歴史的な変化に関するものと、大きく2つがあるが、発展的に、これらの周辺にある問題についても成果が得られた。詳しくは、以下に示す通りである。

(1) 副助詞の日本語学史的の研究に関する成果として、近世最大の文法書である富士谷成章『あゆひ抄』(1778年刊)の副助詞研究の革新性を指摘した。『あゆひ抄』では「副助詞」という用語を使っていないが、語の配列や説明から、現代の我々が「副助詞」と呼ぶ個々の助詞を一群として捉えていことがわかり、また、そこに共通するものとして数量的な意味を考えていたらしいことが読み取れる。これは、現代の副助詞研究の意味的な支柱となるもので、夙にこの点を認識していたことには驚かされる。現代語のとりたて研究が登場する以前に、日本語(特に古典語)だけを対象とした思索の中で、このことに行き着いた意味は大きい。なお、以上の成果は、「5. 主な発表論文等」の〔雑誌論文〕①として公表した。

(2) 日本語学史的の研究に関する発展的な研究として、まず、中世の著者不明『手爾葉大概抄』(室町時代中期以降)の読解を行った。『手爾葉大概抄』は言語を「詞」と「手爾葉」に分けて述べるのだが、これを時枝誠記は「客体的なもの」と「主体的なもの」と解釈した。時枝は、この主客二分論を自身の文法論の根底に置き、しかも、この見方は『手爾葉大概抄』以来、日本語学史の中で脈々と受け継がれて来たものだと言った。これは現在でも通説となっている。しかし、『手爾葉大概抄』を一字一句丁寧に読解すると、そのように解釈する根拠は全くない。同書の「手爾葉」は関係的・形式的な意味を表すものを言い、「主体的なもの」とは考えていない。さらに、従来信じられていたのと違って、言語を「詞」と「手爾葉」に二分する意図も同

書にはないと考えられる。『手爾葉大概抄』は日本語文法学史のほぼ始発に位置する文献であるため、長く誤解されていた解釈が改められたのは、大きな成果だと考える。なお、以上の成果は、「5. 主な発表論文等」の〔学会発表〕②としてまず公にし、次いで〔図書〕①として公表した。

(3)次に、『手爾葉大概抄』の注釈である『手爾葉大概抄之抄』（宗祇著）についての考察を行った。この研究では、「てには」が中世にどのようなものとして捉えられていたかという文法意識を探った。この成果は論文にまとめ、査読のある来年度刊行予定の論文集に現在投稿中である（掲載される見込み）。

(4) 副助詞の形成史的研究に関する成果として、上代のヨリ類についての研究を発表した。ここでヨリ類と呼ぶのは「より」「よ」「ゆり」「ゆ」の4形であり、従来はこれらの新旧だけを問題にし、これらの意味用法や文法的な特徴に関心が向けられることはほとんどなかった。本研究では、これらを一括してヨリ類として扱い、ヨリ類がどのような意味用法を表し、文法体系の中でどのように位置づけられるのかを明らかにした。ヨリ類は、格助詞と第1種副助詞に跨る面があり、その点でマデと共通する。この2つを対応づけることによって、古代語の第1種副助詞の体系はより整然とした姿で捉えられる。また、副助詞の形成史的な観点から見ると、マデとヨリ類（中古では「より」の形に限定される）は、上代から中古にかけて副助詞化が進んだことが明らかになった。なお、以上の成果は、「5. 主な発表論文等」の〔図書〕②として公表した。

(5) 副助詞研究に関する発展的な研究として、まず、同語反復仮定の研究を行った。同語反復仮定条件とは、「明けば明けなむ」のように、仮定条件句と帰結句が同一語からなる表現のことで、この一見、無意味な表現がどのような意味を表すか、また、その意味はどのようなメカニズムによって生じるのかを、明らかにした。さらに、帰結句が本来は終止句であるはずのところ、「消なば消ぬべく」のような従属句となる例が現れる過程と、そのことの文法論的意義についても考察した。この研究を通して、副助詞的な意味が話者の望・不望という評価と深く関わること、および、副助詞がなくても文脈が整うと副助詞的な意味が生じることを明らかにし、副助詞的な意味が発生するメカニズムに関する知見を得た。なお、以上の成果は、「5. 主な発表論文等」の〔雑誌論文〕②として公表した。

(6) 次に、文法形式の研究に関する研究を行った。諸言語を対照する類型論的な通言語的研究という研究方法があり、それによる知見を参照しながら、古代日本語のムード・テンス・アスペクト・エヴィデンシャル・ミラティブについて考察を行った。その結果、通言語的な知見（変化の一般的な傾向とされるもの）が、古代日本語に当てはまる場合もあれば、当てはまらない場合もあることを明らかにした。このことから、外国語の研究成果を日本語に短絡的に当てはめるのは避けるべきで、研究方法の反省になった。ただし、通言語的研究の知見をもって古代日本語に臨むと、これまで曖昧だった点や不明だった点が、輪郭を明確にすることがあり、利用の仕方によっては非常に有益である。この研究を通して、古代日本語の文法形式の変化と意味的特徴を体系的に考察することができた。なお、以上の成果は「5. 主な発表論文等」の〔学会発表〕①として公表した。目下、論文として作成中である（近年中に論文集の一部として刊行予定）。

(7) 次に、本研究のキーワードである「形成史的研究」の基礎となる、上代語の形態論に関する研究を行った。古代日本語の語構成論的研究は蓄積があるが、ある特定の種類の語基をどのようなものとして認識すべきかについて、諸説があり、統一されていない。この研究では、諸説を整理した上で、研究代表者の見方を明確にした。今後、語形成論・語構成論を進める上で、基盤となる足場を確保したことになる。この成果は、論文としてまとめ、査読のある来年度刊行予定の論文集に現在投稿中である（掲載される見込み）。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

- ① 小柳智一『あゆひ抄』の副助詞研究』、『国語と国文学』87-1、pp. 52-68、2010年、査読有
- ② 小柳智一「同語反復仮定の表現と従属句化」、『福岡教育大学国語科研究論集』50、pp. 1-18、2009年、査読有

〔学会発表〕（計2件）

- ① 小柳智一「古代日本語研究と通言語的研究」、日本語学会2011年度春季大会シンポジウム「日本語のテンス・アスペクト・ムード研究と通言語的研究」、2011年5月28日、神戸大学
- ② 小柳智一「『手爾葉大概抄』読解—「手爾葉」と「詞」—」、名古屋大学グローバルCOEプログラム「テキスト布置の

解釈学的研究と教育」第9回国際集会
「ことばに向かう日本の学知 テクス
ト解釈の集積としての学史」、2010年9
月10日、名古屋大学

〔図書〕(計2件)

- ① 小柳智一「『手爾葉大概抄』読解—「手
爾葉」と「詞」—」、釘貫亨・宮地朝子
編『ことばに向かう日本の学知』ひつじ
書房、2011年、pp.79-96
- ② 小柳智一「古代の助詞ヨリ類一場所の格
助詞と第1種副助詞—」、青木博史編『日
本語文法の歴史と変化』くろしお出版、
pp.1-24

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小柳 智一 (KOYANAGI TOMOKAZU)

聖心女子大学・文学部・准教授

研究者番号：80380377